

「ゴードン・マッターラーク」展

会期 二〇一八年六月十九日―九月十七日 会場 美術館企画展ギャラリー二階

未来への反復

奥村雄樹

二〇一五年九月にバーモント州にある高橋尚愛^{ひしやま}さんの自宅にしばらく滞在した。彼とは二〇一三年三月にパリで出会ったあと同年五月にブリュッセルそして二〇一五年五月にアムステルダムで一緒に展示をしたが、日常の時間をゆつくり分かち合うのは初めてだった。僕の任務は半世紀以上の作家活動を通じて彼が制作／収集してきた作品や資料のアーカイブ化だったがスタジオの片隅から古いマテリアルが出てくるたびにそれに関する思い出話を彼から聞くのが何より楽しかった。その中で最も鮮烈だったのがゴードン・マッターラークからの手紙だ。高橋さんは一九六九年からずっとNYでロバート・ラウシェンバーグのアシスタントを務めつつ「記憶」と「コラボレーション」をめぐる自作を展開していたが彼とゴードンは同地の芸術界隈において同世代の親友だった（高橋さんはゴードンの別人格ジョージ・スマッジと展示したりゴードンが友人たちと運営していた食堂「フード」で刺身を提供したりしている）。手紙といってもジェノバの観光絵ハガキが二十枚ひたすら蛇腹式に繋がったもの。一枚一枚の裏面にはそれぞれ美しい風景が印刷されている。表面はというとともにゴードンの肉筆によるパラパラ漫画のように移り変わる色彩豊かなドローイング（上段）と高橋さんに宛てたメッセージ（下段）が全体を横断している。

ドローイングは炎をまとったオレンジ色の太陽が水平線から現れる場面が始まる。それが高くなっていくにつれて海面に反射したその鏡像は逆さまの不死鳥へと姿を変える。不死鳥はエネルギーを放射しながら複数の赤と緑の渦へと分裂し散逸する。その一方で地球自体も少しずつ一羽の鳥に変身しておりやがて飛び立つ。メッセージは「敬愛するサチカ／なんと素晴らしい旅の始まりを君は助けてくれたのか」という言葉で始まる。高橋さん曰くゴードンにはボタンという双子の兄がいたが一九七六年にパリ

でみずから飛び降りて命を絶った。

ゴードンは兄の葬式に出席したいがパリへの航空券がない。そこで高橋さんは手元にあった自分の券を譲った。当時はチェックイン後に券を他人に渡せば簡単に通過できたという。ゴードンはパリのあと欧州各地を歴訪したのだろう（ちなみに史実によればボタンの死地はNYなので渡欧の理由の点で高橋さんの記憶違いがあるのかも）。僕は衝撃を受けた。

あのゴードン・マッターラークに兄がいたのか。しかも飛び降り自殺。ゴードン自身も一九七八年に癌で

死んだ。僕は一九七八年に生まれた

ので自分もしや彼の生まれ変わりで？と以前から妄想していたがこれで真実が増した。僕もむかし兄を飛び降り自殺で亡くしているから（双子ではなかったけれど）。ある人物の身辺の出来事はきつと前世・現世・来世において形を変えて反復するのだ。ある場所における太陽の「降下」が別の場所では「上昇」であるのと同じく生命もまた永遠の円環において転換を繰り返すのかもしれない。

僕は翌年このことに触発されて沈む太陽と落ちる身体を重ね合わせた一遍の詩を綴り高橋さんによる不在の夕陽を望むインスタレーションへの応答としてそれを展示することになるのだが本稿ではその詩から発展した二〇一七年のプロジェクトについて書く。転生のたびに似た出来事が繰り返すのなら逆に特定の誰かに起こった出来事を意図的に繰り返せば自分がその人物の転生者であることの確実性が増すのではないか。そう考えた僕はゴードンが一九七七年にアントワープで展開した三つの活動――①相互に部分的に重なり合うふたつの円をめぐる作品《オフィス・バロック》の制作と②過去作を一点につき一枚の記録写真で提示したミニ回顧展の（二〇〇）（国際文化センター）における開催および③そのカタログとしての書籍の出版――を現在の自分に置き換えて「反復」することにした。この試み全体でひとつのパフォーマンスである。



図1 高橋尚愛さんのバーモントのスタジオにて（2015年9月）

②と③については僕の過去作を一点につき一枚のグラフィックで提示するミニ回顧展を東京の画廊ミサコ&ローゼンで開催しそのカタログとしての書籍を四十年前のデザインとレイアウトとコンテンツに則りつつ僕のバージョンに書き換えて新潟の出版社エディション・ノルトより出版した。①については《オフィス・バロック》そのものをめぐる映像作品《Welcome Back, Gordon Matta-Clark》を制作した。ゴードンはバロックの巨匠ルーベンスの生誕から四〇〇年目の一九七七年に当時二〇〇のディレクターだったフロア・ベックスの招待でアントワープを訪れてスヘルデル川沿いにあった取り壊し寸前の巨大なオフィスビルに介入。内側を縦横無尽に切り刻んで《オフィス・バロック》と名付けた。全階を垂直に貫く連続的な穴の形状はふたつの円が部分的に重なり合ったときの交差のありさまに基づいた変奏である。着想源はフロアとゴードンが打ち合わせ時に飲んでいたコーヒーカーップの痕跡らしい。しかし僕の作品が焦点をあてるのはむしろ個人の生を円という図形に喩えたうえで二者間の重なりや交わりのことだ。兄弟の系ではゴードンとバタンおよび僕と兄の各ペア／友情の系ではゴードンとフロアおよび僕と本作撮影者の田村友一郎の各ペアが登場する。それらのペア同士もまたゴードンと僕との同一性によって時空を超えて結び付き絡み合う。

映像の進展を駆動するのは《オフィス・バロック》自体の転生の物語だ。一九七八年にゴードンが他界した時点で彼が手がけた建築への介入作品で現存するのは世界中で同作のみだった。そこでビルを保存——さらにはその横にアントワープ初の現代美術館を設立——するべくフロアと友人たちは賛同する多数の芸術家たちから作品を集めオークションにかけて資金を作ることにした。しかし不動産会社は事前通知なしにビルを取り壊して同作をこの世から消してしまった。フロアたちは計画を軌道修正。すでに集まっていた作品群をコレクションの基盤とする新たな美術館を誕生させた。それがいままも現存するアントワープ現代美術館(M.HKA)である。二〇一三年にベルギーに拠点を移した僕はこの興味深い史実を知ってそれに関する何らかの作品案を検討したものの現地では誰もが知っている逸話なのでそれをわざわざ語り直す必然性を見出せなかった。でもバーモントでの日々のあとにふと気づいた。この逸話を決して知り得ない人物がひとりいる。それはゴードン本人だ。なぜなら彼は死んでいるから。でもいまや彼は僕なのだ。そして僕は生きている。そこで僕は田村を連れてフロアの自宅を訪れた。かつての親友と「再会」して僕が死んだあと作品に何が起き

たのかを彼の口から直に教えてもらうために。このときの対話の行方についてはぜひ実際に僕の映像作品を観てほしい。

作品を観るといつてもどこで？それには新たな「反復」が要請される。当初《オフィス・バロック》の計画案はビルを切り抜いて巨大な球形の一部を内部に成立させるというものだったが行政から危険視され不許可となった。そのため当局に秘密でビルの内側だけを切り刻んだ。外見は普通の建物なので訪れるのは噂を聞いた関係者ばかり。ならばゴードンは一般の人々を呼び寄せるために地元の新聞にビルの立地を活かした小さな偽広告を打った。その文面を僕なりに和訳するところなる。

「アントワープ／川の眺めが見えるマンション／ステーション城の対面に位置するオフィスビルが驚くほど芸術的な方法で一新されました。広々とした空間、仕事場から生活のための拠点へ、1200平米、独特なデザイン、荘厳な景色、徹底的な改装、すべてのフロアに水が開通、良好な日あたり、安価な賃料(毎月5000フランより)。／実見：毎週土曜日12〜17時。エルネスト・ヴァン・ダイク埠頭通り1番地」

ここにはゴードンならではの遊び心や体制に対する抵抗の身振りが見て取れる。作品を一般に開くことへの強い意志も。僕はそのような態度をいくらか受け継いでいるだろうか。そしてそれを更新できているだろうか？

(アーティスト、トランスレーター)

トウキョウ



よい眺めが - 見える スペース

皇居の対面に位置するミュージアム ルームが 驚くほど 芸術的な映像で 一変します。ヒリヒリとした 時間、自画像 から 転生 による 自伝 へ、2875 秒、独白 が ナレーション、双門 の 奇跡、多元的な 重合、すべて が フロア 氏 みずからの 回想、友情 の 物語、定期的 上 映 (毎時 00 分より)。

実施：7.28 から 9.15 まで 毎週 土曜日 10 ~ 20 時 48 分。
千代田 区 北の丸 公園 3-1

P/L001-adv-180701

図2